

キーコンピテンシーを中心に据えた習得から探求への 学習マネジメントの研究開発

桑田 一也 大橋美代子 三村 真弓 濱本 恵康

1. はじめに

21世紀社会はめまぐるしく変化している。教育界では、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査の結果から、日本の子どもは、勉強ばなれが進んでいるという結果が課題とされている。これは、少子化の流れから大学全入時代と言われていることやゆとり教育論からくるものと一般的には考えられている。

学習意欲を失い勉強離れが課題となっている子どもたちが取りざたされている教育界は岐路に立たされている。文部科学省は今改訂される学習指導要領の中では「生きる力の育成」を継承しつつ、「基礎的・基本的な知識および技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育む」ように言っている。これは、「確かな学力」の育成ということになるであろうが、PISA型読解力でも課題となっているように生活文脈の中で生かせる力として育成しなければならないと言えよう。

では教科学力の一翼を担う音楽科では、これらの課題解決のためにどのような取り組みをすればよいのだろうか。教科の特性から言えば、「音楽」に対する価値感情を高めるとともに「豊かな情操」を養うことが基になるであろう。さらに、今学習指導要領改訂で問われている授業の中に「思考・判断」の場を組み込むことで、熟考しながらも音楽を感受するという側面を忘れてはならないと心得ている。

そこで本研究では、現代社会のニーズ、学習指導要領改訂の重点項目等を考慮した結果、クリエイティブな活動を仕組むことで音楽的な力をつけることに着目する。とりわけ「創作分野」の研究を進めることで、子どもの音楽的力を伸張させたいのである。そして、既習事項をベースに活用する能力＝キーコンピテンシーを新設された「共通事項」と関連させながら、音楽科における習得・活用・探求の学習マネジメント

サイクルを研究開発することを本研究の目的とする。

2. 「活用能力」（＝キーコンピテンシー）育成と「習得」「探求」の連続性について

1990年代の「ゆとり教育」のもとでは、「教師はあまり教えず支援にまわる授業」がよい授業であるという風潮がたった。教師の「教え込み・詰め込み」の批判からである。しかし、「教えるべき知識はきちんと教え、知識を教えるだけにとどまらない教育が必要である」との見方が、今学習指導要領の改訂で柱となっている。これは、「学力を知識・技能だけにとどめず、読解力、論述力、討論力、批判的思考力、問題解決力、追求力、さらには学習意欲やコミュニケーション力など「PISA型学力」でいわれている現実の生活場面で生きて働く力を内包する力としてとらえる。」¹⁾ という、認知心理学に依拠した考え方であろう。この考え方は、中教審の報告の中には次のように表現されている。「知識・技能の習得と考える力の育成との関係を明確にする必要がある。まず、①基礎的・基本的な知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。②こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。さらに、③この活用する力を基礎として、実際に探求する活動を行うことで、自ら学び自ら考えを高めることが必要である。これらは、決して一つの方向に進むだけでなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えられる。」²⁾ つまり、これからの取り組みの方向性としては、学力そのものを狭義の意味でとらえるのではなく、学習のマネジメントサイクルを確立することで、実社会・実生活の中で生きて働く力として育成されるべきだと言えよう。

そこで着目したいのが、PISAの依拠した「キーコンピテンシー（主要能力）」という概念である。この能力概念は次のように定義されている。「単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理

Kazuya Kuwata, Miyoko Oohashi, Mayumi Mimura, Yosiyasu Hamamoto, : Development of music Learning to Develop Student's Ability to Express Themselves (5) Study to Improve Cooperative Creation in the MusicDepartment.

的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力³⁾である。「コンピテンシー」をもう少し詳細に説明すると、「課題状況に応じて自分の持つ複数のスキルを使い分けて臨機応変に対処できる能力であり、また、他者の持つスキルを含めて、その状況に存在するリソースを最大限活用して課題を解決していく能力⁴⁾」と言える。

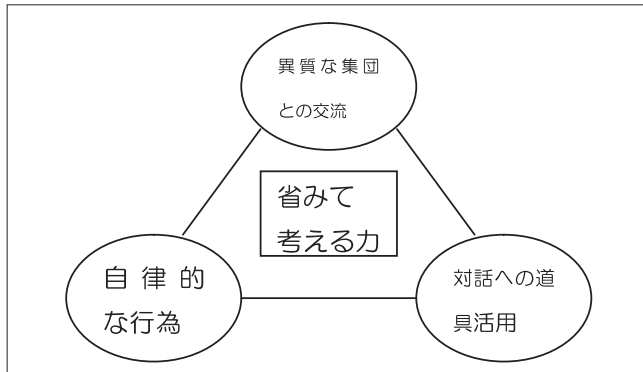


図1 DeSeCoによって定義されたキーコンピテンシー
(ライチェン, ドミニク S. &サルガニク, ローラ H. 『キーコンピテンシー』明石書店, 2006, p.196より転載)

上記の図は、キーコンピテンシーについて説いているが、「中心に『省みる力』を常に常道させて、三つのキーコンピテンシーを使いこなす人材こそ、知識基盤社会にふさわしい人材だとOECDは判断した。言語・知識・情報・技術といった『道具』を『社会的に異質な集団で交流する』ために『活用』し、『自律的に活動する』人を育てるためにどのような教育を行うべきか、OECDは模索し始めた⁵⁾」と言える。

この「キーコンピテンシー」は、活用能力といっても「応用力」に近い、「総合的な学習の時間」のねらう能力である「生きる力」の中核にある「問題解決あるいは課題解決の能力」に近いものと考えられる。つまり、PISAが求めている「活用能力」は、「探求型」の学習に「習得型」の学習結果をつなぐ媒介的な役割を負うものではなく、むしろ「探求型」学習が最終的に育成しようと狙っているものである。

一方、全国学力学習状況調査では、学力検査の項目を「知識」領域と「活用」領域の2つの種類に分けて測る様式となっている。この場合、上記の「総合的な学習の時間」で求めている探求型の学習で培う探求力ではなく、各教科の内部での発展的な学習における活用力の成果を問うものと考えるのが筋ではあるが、実際の問題を見てみると、教科の枠を超える探求型の学習成果を見るものであった。つまり、この学力調査の活用領域で探る能力は、媒介的な「活用力」と最終的な「活用・応用力」の2種類を問うものであると言

えよう。現在日本の教育で考えられている「活用力」は、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題を解く力」、つまり主には「総合的な学習の時間」で育てようとする「探求力」を育成するものと言えるが、それを教科内に置き換えて研究していくことも非常に意義深いことであると考えている。今学習指導要領で問われている「思考力・判断力・表現力等を育成する」ためには「知識・技能を働かせて＝活用して思考する」ことが重要であり、これは探求する学習活動であると言えるが、それを教科学力育成のために置き換える学習としてとらえることも可能なのではないかと考えるからである。そのための学習サイクルを確立することで、知識・技能を習得させ、その力を活用し思考させることで、教科学力を獲得させるモデルを考えることができれば、非常に有意義なことである。

3. 本研究が目的とする「活用能力」(＝キーコンピテンシー)を生かした「習得」から「探求」までの音楽科の学習モデルについて

音楽科の中でまず大切なことは、音・音楽を「知覚・感受」することができることである。これは、今学習指導要領で新設された「共通事項」に明示されている「音楽を形づくっている要素としての音(音色など)、音と音との時間的な関係(リズム、速度など)、連なりや織りなす関係(旋律やテクスチャなど)、音量の変化(強弱など)、音楽の組み立て方(形式や構成など)などの諸要素を意識して感じ取ることである。また、その音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す音楽の「特質」「雰囲気」「音や音楽のよさ、美しさ」を価値あるものとして感じ取ることが必要となってくる。まずこれらを音楽的な基礎的事項、つまり「リソース」として子どもの内面にインプットすることである。

次に、音を通してインプットしたリソースをベースにしてアウトプットするための「思考・判断」する段階に進む。「知覚・感受」して内面で醸成させた音・音楽を今度は子どもが自分自身で表現するために、個人で、または他者とともに熟考するのである。「この部分は、空の星がまたたくように表現したい。そのためには、輝きを生かすようなキラキラした感じで表現するのがよいのか、それとも瞬きを生かすようにひそやかに表現するのがよいのか。よく楽譜を見てみるとppがついているのできつとひそやかに表現するのがいいだね。ひそやかに表現するためにはどのような技術が必要だろうか。どのような表現すればよいかわゆる試してみよう。」というようなプロセスを踏みながら技能を身につけていくのである。それは、音・

音楽を媒介にして、または言葉を介して、個人では内面と、他者とは意思疎通のためにコミュニケーションを通して判断していくのである。その際、感受・知覚の段階で習得した事項を活用するように促す。共通事項と関連させながら学んだ諸要素と照らし合わせたり、自分の感性を生かしたりしながらアイデアを出し、自分の思いに向かって思考錯誤する。このプロセスがキーコンピテンシー（＝活用能力）を用いた学習になる。試行錯誤する際には、思考するための練り合いを通して、音楽を表現するための技能を身につけていくと考える。

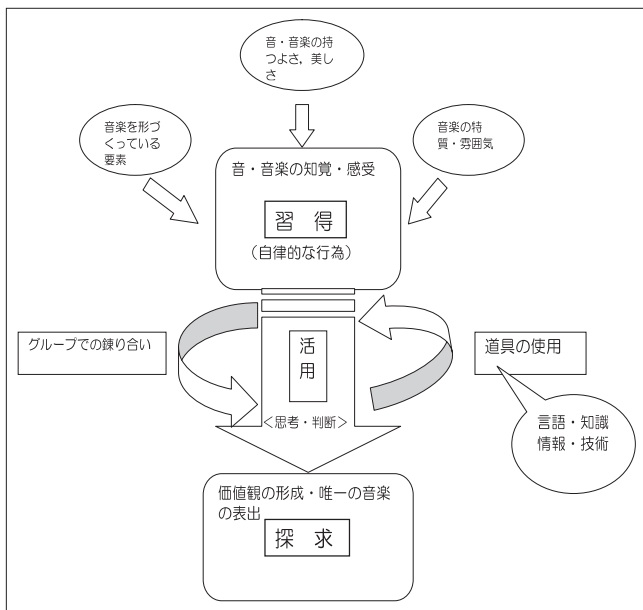


図2 習得から探求までの音楽科学習マネジメント

最終的には、子どもが熟考した表現をアウトプットする段階に入る。それは、上記で触れた「探求」という段階である。この段階では、「思考・判断」したことを「熟考」して、表現することとなる。このプロセスについて興味深いことが次のように記されている。「探求型の学びの過程では、知識や技能を活用することによって習得することが期待されている。しかしそれはあくまでも副産物で、探求型の学びを行う主目的は、「価値観」の形成である。したがって、かりに知識・技能が習得されても、「価値観」に変化が起こらなければ、目標達成したことになる。」⁶⁾つまり、子どもが習得した知識・技能を活用して表現した音楽は唯一のものであり、またそうなるように教師は支援しなければならない。また、相手があってこそ音楽する価値が高まることが予想されるわけで、他者を巻き込んで感動、満足感を得ることができるよう場の設定をする必要があろう。今、説明した「探求」は「活用・応用力」、つまり問いを「追求」することで新たな発

見を行う過程について説いたものである。もう一方の、「実生活・実社会で生きて働く力」を育成する「探求力」についても上記のとおりであるが、これを音楽という教科内で試行するには、題材開発をすることが必要となってくると思われる。

このようにして、「習得」「活用」「探求」の学習のマネジメントサイクルについて説明してきたわけだが、これらは決して途切れることなく連続性を伴って学習を進めることで功を奏することとなる。図2は、以上の過程をまとめた概念図である。

3. 授業の実際

(1) 題材名「ひびきを感じて」

4年生と7年生の合同授業を中心として

1) 教材

○「遠い日の歌 —パッヘルベルの『カノン』による—
作詞：岩沢千早 作曲：橋本祥路

2) 学習形態

・4年生 4名、7年生 4名 合計8名の10グループ構成にする。

3) 学習内容

- ・「8小節間の歌唱」と「9小節間のリコーダー演奏」
- ・歌唱については、ソプラノパートを7年女子、アルトパートを7年男子、男声パートを4年生が担当する。全曲音取りをして80人で合唱する。
- ・「リコーダー演奏」については、高音と低音の2部構成で、ソプラノリコーダーを小学生が演奏し、アルトリコーダーを中学生が演奏する。
- ・さらに、リコーダー部分は子どもによる一部もしくは9小節間の「作曲」を行う。
- ・4年生が主旋律、7年生が副旋律を作曲する。
- ・その作曲方法については、主としてPCソフト「ミュージックキューブ」を使用する。

4) 「作曲」手順について

①「遠い日の歌」歌唱による曲想や雰囲気の習得

②基礎基本の習得

○4分の4（拍子）、音符と休符、リズム、旋律（流れるように、連続して跳躍進行がない方が音楽的であること）

○和音（根音）→ 音を重ねるといこととは？

・3度音程、5度音程がよく響き合う。

③基礎基本の習得について、「ミュージックキューブ」を活用することで実際に定着させる。特に、「拍数」や「音の重なり」は確認しやすい。

5) 小中合同授業を行うことのメリット

①4年生

・歌唱やリコーダーの演奏についてのアドバイスを

7年生から受けることができる。

- ・4年生の考えをもとに、7年生の考え方を得ることでの確に判断することができる。
- ・中学生とともに学習することで、豊かな響きで演奏活動ができる。

②7年生

- ・PCでの「ミュージックキューブ」使用方法について活用方法を獲得することができる。
- ・7年生の考え方だけでなく、4年生の考えも得ることで多様性や柔軟性の学びの構築ができる。

6) 本題材で習得する基礎基本とその活用について

[共通事項] で示される要素 **習得**

- ・音色（ソプラノリコーダーとアルトリコーダー）
- ・リズム
- ・旋律
- ・テクスチュア（音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を受感すること。）

※これらの要素に焦点をあてた指導を行い、音楽が有機的に関連し合って形づくられていることに配慮して指導する。



[創作]

- ・PCで音を確認して、試行錯誤しながら旋律づくりをする。
- ・「遠い日の歌」の「コード進行」をもとにしてそれを手がかりに旋律をつくる。



[表出]

- ・異校種異学年のグループで練り合った価値観を有する音楽の表現を行う。

(2) 研究の仮説

4年生と7年生が独自に基礎基本の習得を行いながら、身につけた基礎基本の能力を合同で活用することにより、より深く探求した演奏を実現することができるであろう。

(3) 4年生と7年生の合同授業の様子

1) 合わせてみよう (第3次)

初めての合同授業では、グループごとに自己紹介をして交流のきっかけをつくっていった。名前や好きな食べ物などの情報を交流し合うことで雰囲気づくりを行ったあと、お互いに進めてきた学習内容を確認していった。3パートで初めて「遠い日のうた」の歌唱を

して曲の雰囲気を掴み、創作箇所のイメージがふくらむようにした。そして、いよいよパソコン室でミュージックキューブによる音の重なりについて確かめていった。1グループ(8名)を、さらに4年生2名、7年生2名のグループ2つに分け、4名で1台のパソコンを使用することで音の重なりの確認作業をしていった。本時は、パソコンから出る音をよりどころとすることで音の重なりを確かめた。パソコンから出される音をたよりに、「なかなか音がうまく重なっている」とか「音が変わ」など感想を持ち、不都合なところは音の変更をするように取り組んでいた。音の重なりが不協和音であってもそれが個性だとするグループもあたり、各リコーダーの音域を越えた音が記されていることに気づかないグループがあったりもしたが、すべてのグループを支援することは難しく、次時に練り直しをさせる必要性も感じた。また、演奏の技能の高まりものぞまれる視点であり、次の授業での課題も見つけることができた。本時を、基礎基本の定着と活用をねらった授業と位置づける。

本時をふりかえり、4年生は次のような感想を持った。

【4年生のふりかえりより】

- ・今日は7年生と協力して曲の練習ができてよかった。
- ・7年生と仲良くできたし、きれいな音(ふしの重なり)ができたのでよかったです。
- ・7年生さんとちょっと息が合わなかったのですが、次はがんばりたいです。
- ・コミュニケーションもとれたし、7年生さんと協力できた。いろいろ教えてくれました。
- ・7年生さんに「すごくあっている」と言ってもらえてうれしかったです。
- ・「遠い日のうた」を歌っていると、7年生さんの歌声がすごいなと思いました。

一方、7年生の思いを調査したところ、ほぼ7割弱の生徒は協力して学習を進めることができたと思ってることがわかった。その理由として「4年生さんが知っているパソコン操作をしてもらって、7年生が「こう変えてみたらどうかな?」と学習を進められたから」「4年生が積極的にパソコン操作を教えてくれてとてもスムーズにできたから」と、教師のねらいどおりに学習を進めたグループがいくつかあったことがあげられる。他にも、4年生と7年生が活発にコミュニケーションできたグループや、曲が完成した満足感を味わったグループは、アンケート評価も高い傾向にあった。しかし、コミュニケーションがうまくとれていないと感じているグループほどアンケート評価が低く、お互いに交流していこうとする意欲に欠けていたことが伺える。合同授業をする際には、出会いの前の心構

えについても指導する必要があることを痛感した。交流するモチベーションをあげるためには、本時の学習内容の精選や構成とともに、交流する態度や言葉づかいなど基本的な生活習慣のルールづくりも必要であることがわかった。以下は、7年生が4年生と学習したことで「よかった」と感じた記述である。

【7年生のふりかえりより】

- ・4年生さんが自分からわかりやすく積極的に教えてくれて助かった。
- ・4年生の歌声がとてもきれいで感動した。
- ・4年生は、パソコンを使って2つの音を訂正してくれた。4年生は、とてもリコーダーが吹きたそうだった。
- ・曲は完成できたけれど、演奏までできなかったの4年生ともっと協力してやるべきだと思った。
- ・学年が違うから、自分とは違った考えをもっていたことがよかったと思った。
- ・4年生さんが考えたメロディに合わせて音を使ったり、工夫したりして、うまく合う音をパソコンで見つけられた。

- ・ソプラノとアルトの重なりがきれいで、両方あわさってとてもきれいに聞こえた。上手だった。
- ・ソプラノが最初二分音符で、アルトが四部音符だった。次の時は両方が入れ替わっていてきれいだった。

【7年生の気づきから】

- ・4年生は始め低く、後から高い音になったところがすごく工夫していると思った。7年生の低い音がとてもやさしく聞こえた。
- ・4年生はけっこう高い音だったけど、7年生はその高い音を包み込む感じの音できれいだった。男子が3人しかいなかったけれど、女子と協力していたのでよかった。
- ・和音が使われていて面白いと思う。もう少しいい音を出せればなおいいと思う。7年生の楽譜にも他の班にない工夫があってよかったと思う。



つくった旋律をPCで確認する4年生と7年生



つくった旋律を錬り合い発表会に臨む4年生と7年生

2) 発表会をしよう (第4次)

まとめとして、4年生、7年生で合同発表会を行った。自分たちのふしは何度も繰り返し練りあいながら練習を重ねてきたが、他のグループがどのようなふしをつくったかを見合う良い機会となった。聴く観点を明確にさせるため、他のグループの発表の感想や気づきなどをそれぞれの楽譜に記入させていった。本時を、探求した成果を表出した授業と位置づける。

【4年生の気づきから】

- ・まちがえていないからすごく練習をして息を合わせたことが良くわかりました。協力できていました。
- ・7年生のアルトの部分がひびいていた。ふくのが難しそうだった。

4. 成果と課題

合同授業を終えた時点でアンケートを行い、次のような結果を得た (図3, 4を参照)。

4年生は9割の児童が肯定的にとらえているのに対し、7年生が肯定的にとらえる割合は6割と減退している。その要因として、4年生と7年生の意思疎通の不足が考えられる。7年生が4年生のよさを引き出し、学習する雰囲気をつくり出すだけの素地を醸成できなかったことが課題であると考えられる。7年生が4年生の思いをうまく引き出し、リードするだけのコミュニケーションが不足していたのである。しかし、本学習を肯定的にとらえている4年生の児童からの感想には、「7年生が知らない音符のなどを教えてくれた。」「最初は楽譜をリコーダーでふくのが難しかったけど、アドバイスをいっぱいしてくれたので全部ふくことができた。やればできるということを学べた。」

と述べられたものもある。これは、合同学習を行うことに価値を見出すことができる「双方向のコミュニケーションをとることができている」と受け取ることができ、いかに支持的風土の中で学習を進めることが大事であるかを教えてくれているかのようである。

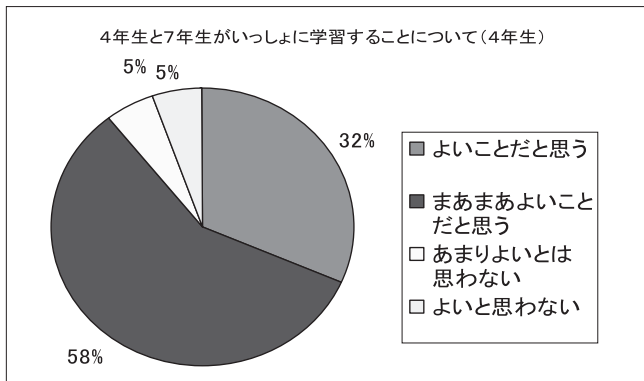


図3 4年生と7年生と一緒に学習することについて(4年生)

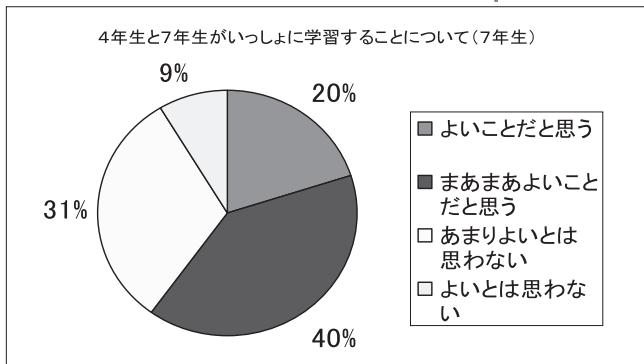


図4 4年生と7年生と一緒に学習することについて(7年生)

さらには、本題材のねらいである「音のひびき」について培うことができたかどうかということについてのアンケート調査では、図5のような結果となった。

その理由として一番多く挙げられている記述は、「ともに協力して練習して演奏できるようになったから」という結果であった。7年生は、4年生と学習を進める中で、音楽を媒介することでめざすものは見えていたものの、思うようにならないもどかしさの中、胸中、葛藤で揺らいでいたと思われる。それは、7年生からすれば年下の子どもは指示をきくものだという傲りとも受け取られる思いがあったのではないかと推察される。しかし、結果的には、4年生はそれなりの音楽的感性を持ち合わせており、ともに尊重し合いながら学習を進めていくことでお互いのよさを発揮し、自分たちの音楽を創造することができたという満足感も少なからず感じていたのではないかと推察することができよう。

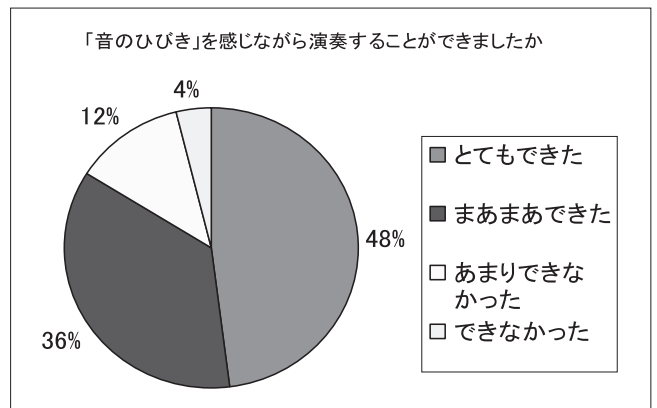


図5 「音のひびき」を感じながら演奏することができたか

5. おわりに

本研究では、習得から探求までの学習マネジメントサイクルを開発するために、小中合同授業という方策を取り入れて試行した。習得サイクルでは、単独の授業で基礎基本を身につけ、合同授業で基礎基本を定着させ、さらには、お互いに身につけたことを活用させることで螺旋的に音楽的思考が働くように導いた。そして、探求サイクルを表現の錬り合いとその表出というところに着目して、相乗効果をねらって小中合同で演奏をさせたところがポイントであった。結果的には、合同授業をしむことで活用サイクルまでは結果を導くことができたと思われるが、指導者側の演奏における錬り合いの支援が不足したり、双方向のコミュニケーションが未熟でお互いを磨き合うところまで到達できなかったりしたために、探求活動が十分だったとは言えない面があることが否めない。また、探求活動が、子どもの五感を十分に発揮させることで感性を揺さぶるだけの学習に発展したのか疑問が残るところもあるが、新学習指導要領による共通事項の定着を図ることの重要性や創作分野に着目して小中合同で学習を深めることには一定の成果を示すことができたのではないかと考える。

引用(参考)文献

- 1) 市川伸一『学ぶ意欲とスキルを育てる』小学館, 2004, p.19
- 2) 文部科学省「中教審審議経過報告」2006, p.16
- 3) 文部科学省「中教審答申」2006, p.9
- 4) ライチェン, ドミニク S., サルザニック, ローラ H. 『キーコンピテンシー』明石書店, 2006, p.196
- 5) 市川力『探求する力』知の探求社, 2009, p.218
- 6) 同前書, p.194